

目的 「海原の沖行く船を帰れとか 領巾振らしけむ 松浦佐用比賣 874」と万葉集にうたわれてゐる領巾、あるいは薬師寺東塔先端の水煙に舞う天女の天空にひるかえる天衣(てんね)は、衿から両肩に垂れ下つてゐる帯状の裂である。我國の飛鳥・奈良時代を中心に、女子の服飾品として受用されたこの領巾の系譜をたどる。

方法 日本に於ては、万葉集 古事記 日本書紀等の分祓、天衣をまとつた仏像、薬師寺の吉祥天画像で代表される絵画などで、領巾の使用目的、服飾美を追及し、領巾の伝わつた経路として、古代インドの遺跡、古代ペリシヤ、古代ローマの彫刻、絵画、中国の分祓、敦煌などの壁画、絵画、仏像等で考察する。

結果 日本の領巾の系譜をたどれば、中国の披帛、帽子が伝わつたものであり、それをさらにたどれば、古代インドのトータ、ヤカリ、古代ペリシヤのキトン・ヒマティオンなどの原始的巻衣の一種であることがわかる。それらが仏教伝来に伴つてシルクロードと他の文物と一諸に、ペリシヤ、ペルシヤ、インドから中国、朝鮮を経て日本に伝わる。仏像の用いてゐる天衣が、軽やかに天女にまとわれ、雲と共に天空にひるかえり、敦煌の壁画と法隆寺の壁画を飾つた。当時の女性も、領巾を身にまとい、古代社会共通の呪術性に加えて、喜び、悲しみ、惜別の情などをそれに託し、非常に美しい装身具となした。